聖　書：Ⅱペテロ 2：1〜5
説教題：ノアたち八人を保護し
日　時：2018 年 3 月 4 日（朝拝）

この手紙の 2 章は偽教師たちについて書かれている章です。3 回に分けて見る予定ですが、とても厳しい言葉が続きます。聖書の好きなところだけを読もうとする人は、開いてもきっとすぐ読み飛ばしてしまう章でしょう。しかしこれはペテロが教会に言い残したいメッセージの中心部分です。1 章 14 節で見ましたように、彼は自分の死が近いことを知っていました。その彼が教会の将来を思って筆を取り、労力をささげて書いてくれたのがこの第二の手紙です。ですから私たちはよく耳を傾けて彼のメッセージに聞いて行くべきです。それに 1 章 20〜21 節では、聖書の預言は人間の意志によってもたらされたものではなく、聖霊に動かされた人たちが「神からのことば」を語ったものだと言われました。これは直接的には旧約聖書の預言について言われたものですが、同じ原則はこのペテロの手紙にも当てはまります。この書も神の霊感によるもので、神が必要と考えて私たちにお与えくださった書です。ですから私たちは他の箇所に劣らず、この箇所も大事な神のメッセージが語られている部分として聞いて行かなければならないことになります。

ペテロはまず「イスラエルの中には、にせ預言者も出ました」と語ります。すなわち偽教師の問題は今に始まったことではないということです。神の民の歴史にはいつも見られたことである。ですからこれは今日の問題でもあることになります。私たちはここをはるか昔 1 世紀の話として聞くのではなく、今日の私たちにも当てはまるものとして読んで行かなければなりません。1〜3 節には偽教師たちの特徴が 6 つ述べられています。一つ目は「滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み」。「異端」というと、私たちは教会会議で公に断罪された教えのことを思い浮かべるかもしれませんが、この時代はまだそういう意味で異端と断定された教えがあったわけではありません。これは「違った教え」といった程度の意味の言葉です。それを「持ち込み」と言われているということは、外から持ち込まれたこと、すなわち伝統的な教えにはなかったもの、使徒たちの教えとは異なるものということになります。それを偽教師たちは「ひそかに」持ち込んだ。すなわちすぐにはそれと分からない。他の箇所に「サタンも光に御使いに変装する」という言葉がありますように、一見区別がつかない形で侵入して来る。ですから識別力が必要です。そして「滅びをもたらす」と言われています。これに従う者たちを滅びへ導くの

です。ペテロがここで問題にしているのは、このような重大な結果をもたらす教えのことなのです。

二つ目は「自分たちを買い取ってくださった主を否定するようなことさえし」。この「主」とは主イエス・キリストを指していると思われますが、ここで使われている言葉は通常使われる「主」という言葉とは違うもので、特に主権的力を持つ支配者を指す言葉です。その主権者・支配者を否定するとは、教理的に否定するというよりも、生活においてその主権者を認めないこと、その支配に従わないことを意味していると考えられます。三つ目は「自分たちの身にすみやかな滅びを招いています。」　先に「滅びをもたらす異端」と言われましたが、これに従う人々ばかりでなく、これを伝える彼ら自身が滅びを自分自身に招くということです。

四つ目は「多くの者が彼らの好色にならい」。ここにこの偽教師たちの特徴が現れています。「好色」という言葉は、この後 7 節と 18 節にも出て来ます。すなわち不道徳な生き方に関わる言葉です。彼らはまさにこの生活によって主を否定していた。そして「多くの者がならい」とあるように、多くの人々が影響を受けてしまっていました。五つ目は「そのために真理の道がそしりを受けるのです。」　不道徳な生活をしていればそうなります。キリスト教は好色を容認する宗教なのか、不道徳をよしとするのか、そんな宗教を信じて何の良いことがあるのかとそしられる。そして六つ目は「彼らは、貪欲なので、作り事のことばをもってあなたがたを食い物にする」。15 節に「不義の報酬を愛したベオルの子バラム」と出て来ますように、偽教師たちは利益を得ることに関心があったようです。そのためには作り事のことばを話すことも厭わない。

果たしてこの偽教師たちはどういう人たちだったのでしょうか。このペテロの手紙第二はユダの手紙と良く似ていますが、ユダの手紙の 4 節にはこうあります。「というのは、ある人々が、ひそかに忍び込んで来たからです。彼らは、このようなさばきに会うと昔から前もってしるされている人々で、不敬虔な者であり、私たちの神の恵みを放縦に変えて、私たちの唯一の支配者であり主であるイエス・キリストを否定する人たちです。」　ここにユダの手紙で問題になっている人たちは「神の恵みを放縦に変えて」とあります。すなわち恵みによって救われたのだから罪を犯していても問題ないという主張です。人が救われるのは良い行いによらず、ただ恵みによる！と言って、罪の生活を続けることを正当化すること、不道徳な歩みを許容・肯定することです。しかしある学

者はユダの手紙とペテロの手紙を同一視すべきでないと言います。似ているところはたくさんあるが、違うところもたくさんある。そしてペテロは偽教師たちについて「神の恵みを放縦に変えている」とは言っていないと言います。むしろペテロの手紙で強調されていることは、偽教師たちが将来のさばきを否定していることである。前回も見ましたように、3 章 4 節にこういう主張が出て来ます。「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。父祖たちが眠った時からこのかた、何事も創造の初めからのままではないか。」彼らはこうしてキリストの再臨また最後のさばきを否定していました。このことと彼らの不道徳、好色の歩みは結び付いていたのでしょう。ペテロはこのような彼らのメッセージは滅びをもたらすものであるとして、これにだまされないように！と警告しています。さばきがないということはない。むしろさばきは昔から怠りなく行われていて彼らが滅ぼされないままでいることはないと。その実例として 4 節以降で三つの実例を語ります。4 節から 10 節前半までは原文で一つの文章になっていて、本来は一気に見るのが良いと思われますが、時間の関係上、今日は最初の二つまでを見たいと思います。

さばきが昔から怠りなく行われている一つ目の例は、罪を犯した御使いたちに対するさばきです。4 節 :「神は、罪を犯した御使いたちを、容赦せず、地獄に引き渡し、さばきの時まで暗やみの穴の中に閉じ込めてしまわれました。」　果たしてこれはいつの出来事でしょうか。聖書のどこに記されているでしょうか。ある人は人間が創造される前の、悪魔とともに堕落した天使たちのことではないかと見ます。イザヤ書 14 章やエゼキエル書 28 章に、そのことを暗示する御言葉があります。またある人は創世記 6 章の最初に記されている洪水前の出来事と考えます。すなわち神の子らが人の娘たちのところに入り、彼らに子どもができたという話です。そのころネフィリムが地上にいたというあの記述です。しかしあの創世記 6 章前半をどう理解すべきかについては議論のあるところです。特に「神の子ら」という言葉を先ほどのように天使と取る人もいますが、人間、特に神を信じる者たちと理解する人たちもいます。そこで多くの注解者は、ここに書いてあること以上に進まないように！と警告します。ペテロのポイントは、罪を犯した御使いたちはさばかれたということであって、彼らが何をしたとか、どんな罪を犯したということについては述べていない。カルヴァンもこの節の注解においてこう述べています。「ペテロは、この箇所では天使たちの失墜について短く語り、かつ、その時期、その方法、その他の状況について語っていないがゆえに、われわれもまたここでは、詳細に論ずることを控え目にしなくてはならない」と。書いてないことを色々詮索して思弁に陥り、結局メッセージから離れてしまうことは避けなくてはなりません。はっき

りしていることは、罪を犯した御使いたちがいたということ。その彼らはさばきの日まである場所に閉じ込められているということです。「地獄に引き渡し」と訳されていますが、これは最終的な場所ではありません。そこは暗やみの穴の中と言われています。それはさばきの場所ではありますが、最後のさばきの日にはもっと厳しい、最終的なさばきを受けるのです。

二つ目の例は、5 節にあるノアの時代のことです。創世記 6〜8 章に記されていることです。地は神の前に堕落し、人の心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった神は不敬虔な世界に大洪水を起こされました。あの出来事で衝撃的なのは救われたのはたった八人だったことではないでしょうか。ノアと 3 人の息子たちと、それぞれの妻の合計 8 人です。それ以外のすべてのものが滅ぼされました。ですから多数の側にいれば大丈夫ということにはなりません。「神は悪をさばかれると言ったって、そんなことが起きたら、神を信じない世界のほとんどの人がさばかれなければならなくなる。そんなバカな話はあり得ない。」というような論理は通用しません。大多数の人が自分と一緒であるということは、それ自体では安心材料にはならないのです。当時の人々は、ここで言われているようにノアの宣教に接しました。ノアは相当に長い期間、神に言われた箱舟を造っていましたから、人々からなぜそれを造っているのかと問われた時、神のメッセージについて語ったことでしょう。悔い改めてさばきから救われるようにと語ったでしょう。何よりもその箱舟制作の姿が雄弁に彼らに警告を語っていたでしょう。しかし彼らは聞きませんでした。そんな日は来るはずがない。地を満たす洪水など起こるはずがない。さばきなど来ない。バカバカしい！と。しかしそれは実際に来ました。イエス様も言っています。「その日まで人々は飲んだり、食べたり、めとったり、とついだりしていました。そして洪水が来て、すべてのものをさらってしまうまで、彼らは分からなかったのです」と。このノアの洪水は単なる歴史的記録ではなく、神のさばきは昔から怠りなく行われていることのしるしです。神は悪をさばかれる方であり、最後のさばきの日は必ず来るという、この世に対する重大な警告なのです。

しかしこの出来事には慰めのメッセージも含まれていました。それは 8 人の者は救われたということです。全世界の中のたったの 8 人です。ペテロは第一の手紙の中でも、ノアの洪水で 8 人が救われたことについて述べていますが、そこでは「わずか八人の人々が」と言っています。しかしだからと言って神は無きに等しいと考えて、他の大多数と一緒に滅ぼすことをされませんでした。たとえどんなにその数が少なくても、神は義を

宣べ伝えたノアたち８人を保護してくださいました。この「義を宣べ伝えた」とはどういう意味でしょうか。それは神が義のお方であること、従って悪を見過ごしたままにはされないこと、必ず悪をさばかれる日が来ることを宣べ伝えたということでしょうか。もちろんそれもあると思います。しかしそのような神のご性質としての「義」とともに、ここに含まれているのは「義の生活」ということだと思われます。ここでの義は、この世の「不敬虔」と対比されています。これはもちろんクリスチャンは完全無欠の人でなければならないという意味ではありませんが、神と共に歩む人はその実が正しい生活に現れなくてはならないということです。ノアは神が正しいことを宣べ伝えただけでなく、神と共に歩む者は、この世の悪に染まらず、神が御心とされる正しい道に歩むべきこと、そのことを日々の生活を通して証ししたのです。そしてそういう者たちが救われたのです。次回もう一つの例、すなわちソドムとゴモラ、およびロトについての話を見ますが、それらを経てペテロは言いたいメッセージを 9 節で次のようにまとめています。「これらのことでわかるように、主は、敬虔な者たちを誘惑から救い出し、不義な者どもを、さばきの日まで、懲罰のもとに置くことを心得ておられるのです。」　神はこのように敬虔な者たちを救い出してくださいます。しかし義と反対の道を行く者たち、すなわち不義な者どもを懲罰のもとに置き、やがてのさばきの日に、その懲罰が指し示す最終的なさばきを下されるのです。

私たちは自分を振り返ってどうでしょうか。キリストの再臨の日、また最後のさばきの日が来ることを見据えて生活しているでしょうか。いつの間にかこのメッセージを忘れ、否定し、頭から消し去って、今日の偽教師たちの教えに取り込まれていることはないでしょうか。そして周りの好色にならって、主に従わず、滅びへ向かって進んでいることはないでしょうか。ペテロが言っていることは、さばきの日は必ず来る！ということです。歴史の中に、その前触れは色々な形で示されています。その前兆はいくらでも示されています。私たちはそのことをもう一度受け止め、その光の下で自分の今日の生活を見直し、整えさせられたいのです。

そしてペテロが合わせてここで強調していることは、正しい歩みの必要性です。ノアたちは義を宣べ伝えました。先に述べたように、これは「義の生活」ということです。これはもちろん、人間の良い行いによって救いを勝ち取るという意味ではありません。すでにペテロは１章３節で、私たちがいのちと敬虔に歩むためのすべての力は主イエスの神としての御力が与えると言っていました。そして４節に、そのゴールは神のご性質

にあずかる者となることだと言いました。キリスト教は、自分はイエス様を信じて罪を赦されたと言って、あとは不道徳な歩みをしても良いというものではありません。4 節にも「世にある欲のもたらす滅びを免れ」とありました。信じた者は、それらから離れて、いよいよ神に似た者となる道を行くのです。そのための力を主イエス様の神としての御力が与えてくださるのです。ですから私たちは誤った教えに流されず、また周りの多くの人々に流されず、主の再臨の日は必ず来ること、さばきの日は必ず来ることを見据えて、いのちと敬虔の道を歩みたいと思います。信じていることを口で語るだけでなく、ノアたちのように、その生活を通して「義」を宣べ伝える者たちであるように。そして大洪水が指し示すやがてのさばきの日が来ても、神によって救い出され、むしろ喜びをもって御前に立ち、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの永遠の御国に入る恵みへと導かれる者たちでありたいと思います。